

「アポロ30周年によせて」

月日の経つのは速いもので、ニール・アームストロング、バス・アルドリンが人類の歴史が始まって以来初めて月の表面に足を下してから、30年が経とうとしています。このアポロ・プロジェクトにサイエンス関係で携わった者の一人として、あの当時のエクサイトメントは今でもはっきりと頭に浮かんで来ます。アメリカ、ソビエトの宇宙開発は勿論その10年ばかり前から始まっていましたが、アポロ・ミッションは何と言っても一期を画す重大なイベントで、このミッションのその後の科学、技術分野に及ぼす影響は数え切れないと言っても過言ではないでしょう。しかし30年を過ぎてしまいますと、当然そんな事は昔のこととしてしか考えられない人達が次々と増えて来ています。(実際に、私が今教えている大学生は誰もまだ生まれていませんでした。)その30周年を記念して、日本惑星科学会が「遊・星・人」の特集を出すとの計画を伺い、あの当時は思い浮かべて、そう言った若い人達を頭に入れて、一言書かせていただきます。

もともとアポロ・プロジェクトはアメリカで当時のソ連との宇宙開発の競争と言った多分に政治的な目的で始まった計画でした。しかし結果としては技術、科学の分野でも非常に有意義な結果をもたらした事は異論がありません。特に技術的な面では、あれだけの事を決められた時間内に遣り遂げるという事は容易なことではなかっただろうと思います。(当時のケネディー大統領は1961年の5月に、1960年代が終わる前にアメリカは人間を月に降し、そして無事に地球へ帰らせると発表。)それに伴って開発された種々の技術がその後色々な面で技術発展に大いに役立っている事は否めません。

政治、技術面に比べて、アポロ・ミッションの科学的目的はどちらかと言えば補助的なものだったと言えます。にもかかわらず、その結果は予想外に大きいものでした。私の関係した月の地震(月震?)観測に例を取っても、実際に月から送られてくるデータはこの地球上でのそれまでの経験から予想していたものとは大きく掛け離れたもので、全く新しい解釈を必要とし、それに伴ってこの地球を、そして月も含めた他の惑星を新しく広い見地から見直す切っ掛けとなります。それと同時に人間の想像力とはいかに狭いものかと言う事を思い知らされたのもその頃でした。他の分野にしても同様で、アポロ11号の後、12、14、15、16、17と続く各ランディングの後数週間と言うものは、皆リアル・タイムで送られて来るデータの回りに集って白熱した議論を続けたものでした。

政治的に見ても、アポロ・プロジェクトは最初のソ連を追い越すと言った目的を遙かに越えた利点があった様に思えます。あの当時はアメリカ合衆国の全国民がこのプロジェクトに熱中し、そう言った意味でもアポロ計画は国全体を纏める役割を果し、そして国勢の高揚を図る非

常に良い契機になったと思います。これだけの事を人間が戦争と言うネガティブな方法ではなく完全にポジティブな方法でなし得たと言う事は注目に値します。これは私見かも知れませんが、エジプトのピラミッドも同様な目的／効果があったのではないのでしょうか。

宇宙開発はこれからも若い世代の人達によって続けられて行く事でしょう。これから先どんな予想外の事が私達を宇宙のかなたで待ち受けているかと思うと、この先が益々楽しみです。それと同時にその楽しみを世界の人類全体で分け合うことも私達のこれからの使命だと言うことを考えさせられるこの頃です。

中村吉雄 (テキサス大学 地球物理学研究所)